
GOD EATER ALTERNATIVE LOG

ノンサイクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOD EATER ALTERNATIVE LOG

【ノード】

N8520W

【作者名】

ノンサイクル

【あらすじ】

新しい世界で始まった化け物「アラガミ」としての生活。

親切なおばあさんの下で日々をほのぼの六割・シリアル四割・説明成分多数でお送りします。

若干主人公はチート気味の能力ですのでチートご都合主義等が苦手な方は戻るボタンを連打することをお勧めします。

この作品の作者は感想を栄養分に執筆していくので時間があれば感想お願いします。

またこの作品は試作段階のものでいきなり大幅な改定や統合

を行つ可能性があります、ご注意ください。

第0話 アラガミ、大地に立つとのこと

なぜこうなったのかはわからない。

俺は普通とは言えない成績だったがなんとか単位を落とすことなく大学を卒業したはずだった。

今のアルバイト先でこのまま就職することも決まり社会人生活が幕を開けるはずだった。

なのに・・・俺はあっけなくこの世からはじき出されてしまった。

いつもどおりに終電電車に乗り下宿先に帰ろうとしていた。

ただそれだけだったのに、そうただそれだけだったのに、俺はホームから落ち電車にひかれて死んでいった。

まあ、こいまではいいとしよう、だが・・・これはないだろう?

死んだはずの俺の目の前に広がるのは花畠でも川でもなく。

見たことのない神社らしき建造物の内装だった。

第0話 アラガミ

どうも俺は死んでいなかつたらしいがなぜに神社に居るのかは全く持つて不明。

H A H A H Aなんだか全身の感覚がおかしい気がするけど気のせいだ、ああ気のせいに決まってる。

そうだよな俺は四足歩行なんてしていないよな?

「（なーんで）いつなつたーーー？）」

「おんやまあ、神様がお答えくださったのかねえ、ありがたいことだわ」

「ーー？」

「おやおや、一度もお答へくさるとは・・・」

聞こえてきたのは年を取った女性の声だ。

そしてここは神社、それから俺の灰色の脳細胞の導き出した答え、それは・・・「参拝客」

そうこの神社と思しき建造物に参拝客が来ていたのである。やつた、これでどうなっているか分かる！

「ガルルルルルル！（ばあせんー）」

「おお、でつかいお犬さまだねえ。もしかして神様の使いかねえ」

・・・ー？

チヨットマテ、今このばあさんはなんと言つた？

そして俺はどんな声を発した？

「グラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーー？（ええええええええええええええええーー？）」

「おやおや、どうしたんだい？」

そして俺の新しい日常が始まった。

第1話 アラガミ、はあむと出でゆつる

そんなことがあってから一時間後、おばあさんの計らいによつての神社に居座つてることに・・・なんといつーート。

第1話 荒神、おばあさんと生活すること

「おやまあ、お前さんは犬ではないのかえ?」

「ガウー（おウー）」

なんとこのおばあさん、いい人だ。
いきなり自分の神社に現れた怪物に対してもこの対応。
俺は慈母の神をここに見た!

「それも人の言葉が分かるのかえ、お利口だねえ」

「・・・」

その後、おばあさんに鏡を見してもらつたのだが・・・
この容姿に自分は見覚えがあつた、そうそれは・・・
アラガミ、オッドエーターというゲームの敵モンスターそれの中でも最弱クラスの能力である「オウガテイル」という種類のものに酷似しているのだ。

「グルルルルル・・・（ええええ・・・）」

「どうしたのえ？落ち込んだりのか？」

いやだつてさ、ばあさん。

いきなり化け物に転生？憑依した挙句にそれはゲーム内では最弱の奴でしたーつてさ。
これはないわ。

「グウウウウウ（せめてヴァジュラとかならよかつたの）」

「何に落ち込んだのかはわからんがお菓子でも食べるかえ？」

おおおお、お菓子ですと！？
なんだか無情に腹が減っていたんですよ。
ぜひ食べさせてくださいな！

「グルルル！（くれー！）」

「おやおや、そんなにがつつかなくともひゃーんとあげますよ。」

そういつてばあさんは奥にお菓子を取りに行つた。

さて、これからのことを考えよつ。

こういう時はネガティブになつちゃいけないつてTVで心理学者のお偉いさんが言つていた。

まずはだ、現状確認をしよう。

ここはおそらく日本、それも俺の勘が正しければ1960年代。
ここは古びた神社で居住者はばあさん一人のみ。

そして問題なのはここからだ。

俺はアラガミとなつてしまつている、それもオウガテイルだ。
すでに入よりも大きく、その気になれば人一人ぐらいなら頭から人
のみにしてしまえる。

さらに俺の体はおそらくアラガミなので不思議物質「オラクル細胞」で構成されている可能性が非常に高い。

すなわち、オラクル細胞の基本性質「自己進化」「自己再生」「自己増殖」を持つているだろうとこいつことだ。

このオラクル細胞は「既存の（2050年といつ近未来の）あらゆる兵器が効果を示さなかつた」という設定があつたり常時侵食して進化のための要因として取り込もうとしたりとトンテモノなのだ。

ゆえに

「お前さん、お菓子ですよ。口元つかは分からんですけどねえ」

「（モグモグモグモグ）」

ゆえに

「煎餅もありますよ」

「（バクバクバクバク）」

ゆえに

「羊羹もどいわぞ」

「（モツシャモツシャ）」

ゆえに・・・なんだつけ？

「おいしかったかえ？」

「ガオウ！（眞かつた！）」

「やうかいそうかい、そりやあよかつた」

あー眞かつた。

第2話 アラガミ、氣りへんの「」

ばあさん、「飯を食わしてもらひて、

田向ぼっこして、

落ち葉と戯れて、

裏山の木を切り倒して、

といった感じの日々を繰り返すこと早一月。

「グルウウウ（ばあさん）」

「よびましたかえ？」

最近ではばあさんとの意思疎通も前よりは格段に向上し大体ならどう思つているのかを伝えるようになってきた。
気づけば何も言つていなくても「」からの意思を理解することさえある。

ばあさんがハイスペックすぎる。

「グワア（水くれ）」

「あ、はいはいお水ですね」

俺はアラガミなので飲まず食わずでも死にはしないができれば欲しいものである。

ちなみにだが痛覚はある、といつか物凄く敏感だ。

「はいよ、お水ですよ」

「グルグルウ（ありがと）」

といふかなんだかなじみ過ぎて忘れかけていたけどさ。

俺ってアラガミだよな？

「近所さん（毎朝駅に向かつて走つていくサラリーマン）は俺のこ
と見てても何にも言わなかつたけど・・・
なんなの？」

2M以上もある化け物見ても驚かないってなんなの？

第3話 アラカリ、驚くとのこと

そんな生活をして気づけばもう一年が経つた。

ばあさんが言つには今年は西暦で1968年なんだそうだ。
ただ、問題が起つた。

そうこの世界に俺以外にも化け物がいた。

それは「BETA」すなわち。

Beings of the Extra Terrestrial
1 origin which is Adversary of
human race 『人類に敵対的な地球外起源生命』
と呼ばれる、いや後にそう世界中で呼ばれる事になる存在だった。
ぶっちゃつけて言つてしまおう。

ここは「マブラヴォルタネイティブ」の世界に酷似したところである
といふことが判明した。

ばあさんは

「世間も物騒になりましたねえ、宇宙で戦争ですとえ」

と呑氣に言つていたがその後の顛末を知るものとしては恐怖でしか
ない。

人類の大半が死亡し、最終的には選ばれた極少数の「人類」のみを
生き残らせるという凶行に走らせざるを得なかつた悪夢の序章が始
まったのだ。

最近では字を書くとういう方法によつてばあさんとのより正確な意
思伝達ができるようになつっていたのでいくつものことを聞いて確定
した。

曰く、この世界では核爆弾は日本には投下されずにベルリンに投下された。

曰く、この世界の主力兵器は地上の戦術機、そして空中の戦闘機だとこゝりと。

曰く、この世界の日本は日本帝国であり国務全権代行者は政威大将军であるとのこと。

ああこれはまず間違いなく「オルタネイティブ」の世界だ。

眩暈がする。

今まで化け物である自分ですら優しく受け入れてくれたばあさんやご近所さん達が、皆、そつこどもとく死んでいくのが分かつてしまふだなんて。

認めたくないし、認められるわけがない。

だが現実に第一次月面BETA戦争は勃発しオルタネイティブ2と思われる動きも感じ取れる。

じゃあ。

俺は何もできないのか。

いや違う。

俺は化け物だ、それも正真正銘、それもBETAなんぞよりも潜在能力という点においては上の。

なら、俺がすることはただ一つ。

自分の怖されたくないものを「化け物」なら化け物らしく壊そうとするやつらを壊してしまえばいい。

第4話 アラカリ、別れの時とのこと

それからせりに五年。

遂にBETAが人類の生活領域「地球」に浸出する年。
ばあさんは寝込んでいた。

「グルウウウ（ばあさん、大丈夫か）」

「おやおや、心配されるほどには弱ってませんよ」

そんな軽口とも言えないことを言つものの介護とかには素人の俺が
見てもどう考へても弱つていた。

最近では寝込む日も増え、外に出ることは珍しくなってしまった。
おせっかい焼きなご近所さんがわざわざ仕事に行く前と帰ってきて
から介助をしてくれているが頼り続けるわけにはいかない。
かといって自分はいまだにオウガテイルもどきからヴァジュラティ
ルもどきになつただけでどう考へても介護なんかできない。

「心配せんでも迷惑はかけんですえ」

「グラアアア（気にスンナし、頼つてくれ）」

「ふふふ」

こつはいうものの本器で困つている。

食事に關しては「近所さんの作り置きがあるからなんとかなるが排
泄関連の介護やら買い出しやらと問題は山積みだ。

買い出しに關しては最悪自分が動くにしても・・・ですがにこの四
肢じやあ排泄介護は不可能だ。

はたしてどうすれば・・・いきなり人型になつたりすればいいのだが人型になる要素のものを食つていないし・・・

「まあまあ、大丈夫と言つてゐるでしょ？」

「グラアア（しかし・・・）」

そういうてばあさんは眠りについた。
永遠の、眠りに。

次の日の朝、自分が見たものは満足そうに微笑んでこの世を去つた
ばあさんの姿だった。

第5話 アラカリ、落ち込むとのいじ

ばあさんが死んだ日から一日、「近所さんに手伝ってもらおう」とばあさんの葬式を済ませて簡単なものが神社の裏に墓を作った。
結局俺はばあさんに頼り切りだった。

この神社に住んでいたのもばあさんが取り計らってくれたおかげだ。

「グラアアアー！（ばあさん、こままでありがと）」

「悲しいのかね？だが悲しんでいても何も進まんよ。」

「近所さんはばあさんから神社の土地の権利書を預かっていたらしく今まで住んでいたアパートから神社に移り住むそつだ。
すなわち、俺の新しい家主は『近所さんあらため近藤さんとこづ』
とだ。」

「とにかく、まずは掃除でもしようか。」

「グル（おう・・・）」

「30いかないような若造が言うのもなんだが、おばあさんもいつまで引きずつてほしいとは思わないぞ。忘れてはいかんが。」

たしかに近藤さんの言ひとおりだった。

あのばあさんのことだ、天国だかなんだかわからんが「自分の」とはいいからやりなせえ」とでも言つてゐるだろ。

「グルウウ・・・（ばあさん・・・）」

たつたの5年だつたがばあさんと週1回した日々は毎日が楽しかつた。
どこから仕入れてきたのかわからない羊羹を神社の縁側（なぜ神社
にあるのかは不明）で食べ。

落ち葉を集めて焼き芋をしたり。

雪玉に砂糖をかけて食べてみたり。

・・・なんか食い物関係ばかりだつたけど、間違いなく充実した
人生いやアラガミ生だつた。

「グルオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

夜中に俺の遠吠えが響き渡つた。

その後、近所迷惑というクレームが近藤さんのもとに多数届くこと
となり、近藤さんと一緒に周りの家に謝りに行く羽目になつた。

第5話 アラガミ、落ち込むとのじと（後書き）

しまらない終わり方だなあ。
うーむ、文才が欲しいものです。

第6話 アラガミ、期限を知るとのこと

ばあさんが死んだあの日から、もう一年が経とうとしていた。
近藤さんも神社で暮らす日々に慣れ、毎日墓参りをしてから会社へ
と出かけて行つた。

だが、俺は何も変わらない。

一年が経つたがまったくアラガミとしての進化が見えずヴァジュラ
テイル止まりのまま一年を過ごしていた。
俺の前世の記憶が正しければそろそろ世界人口がBETA出現前の
三割減となるころだ。

焦りが生まれてきているのは自覚している。
自分は何をしているのだろう。

いまだ日本にはBETAが来ていないが、今頃大陸ではすさまじい
数のそれこそ史上最大の数の人間が死んでいるはずなの!」。

もしも、俺がもつと早く進化して長距離を飛行できるならば今すぐ
にでもBETAどもを喰いつぶしてやりたい。
だが、現実として今の俺は陸上で走らせていいせいの六十km/hぐらい
が限界なのだ。

「化け物」らしく守るのと決意した日からもう六年が経つてしまつ
たのだ。

今は夏の始まり、六月二十三日。

悪夢の日、西暦1973年4月19日から一年と一ヶ月ばかり。
果たして自分は間に合つたのだろうか?

1998年、BETA日本上陸まであと14年。

ここ、横浜に後14年もすればBETAの大群が押し寄せ、果てはHIVEまで作られ、最後にはG弾まで投下され全てが無茶苦茶になるのだ。

・・・気持ち悪い、絶対にそっぽさせない。

せめてここ横浜、いやこの神社だけでも守り抜かなくては・・・

第7話 近藤さん、道を語るひとのいる。

1974年7月6日、BETAが北アメリカ大陸に着陸したとのニュースが報じられた。

しかし、その後、アメリカはカナダ領内であつた着陸地点に対して戦術核の集中投下を敢行。結果としてカナダの半分もの領域の核汚染と引き換えに北アメリカHIVEが出来ずに済んだのだった。

「ふむ、これをどう思うかね。」

「グルルルルル（これは・・・）」

「さすがにどうかと思うがね、まああくまで私個人の考えだが・・・」

「グワオオオ！（横暴すぎる！仮にも他国領土に戦術核だと！？アメリカは地球を不毛の大地にでもするつもりか！）」

そもそものはずである、主人公の知つてゐる正史においてはアメリカは最終的に地球を放棄しG弾による殲滅を行おうとしたのである。結論から言へばアメリカは種としての存続、そしてこのBETAとの戦いの後を見据えて行動を起こしているともいえる。

しかし、だからといって頭では理解できても感情が許さないものである。

「せうかお前さんはこれには反対か。まあ私も同意見だ。せめて非汚染兵器でどうにかすることはできなかつたものかと思つね。」

たしかにそうである。

究極的には火力さえ釣り合えば普通のミサイルを多量に叩き込むことでもどうにかできたはずである。

だが、実際問題では火力が釣り合つなどといつ」とはない。それこそ核兵器一発で一般的なミサイルの数百倍もの火力を有するのだ。

確実に殲滅しようとするどいつもして核ミサイルを使わざるを得なかつたのかもしれない。

「だが、これは今後のアメリカの行く先の縮図かもしけんな。」

「グワ？（縮図？）」

「ああ、私には今後もこいつ強攻策をとり続けてどんどんと孤立してゆくアメリカが容易に想像できる。しかしそのものがアメリカを批判することはないだらうな。」

「グルルルル・・・（なんで・・・完全には孤立しないんだよ・・・）」

「それは単純明快だ。それしか解決策が無かつた、と多くのものが心のどこかで思つてゐるからだよ。」

「・・・」

この日、人類は一つの道を知ることとなる。

アメリカのようにそれしかなかつた、と現状の最善策を取る道。

そして、理想によつて最高、と言えるまだ見ぬ最善策を作り上げる道。

この一つを知る」ととなる。

第7話 近藤さん、道を詰めるヒロ。 (後編)

なぜか近藤さんの回し・・・
そんなはずでは・・・

第8話 アラガミ、戦術について学ぶとのこと

1975年。

この年、遂にソ連がBETA進行に耐えきれなくなり首都の移設を行つ。

それに伴い核研究施設や軍需施設、さらに生活基盤部分の生産施設もどんどんと疎開を行つていく。

さらにこの年、いや正しく言えば昨年から続いていたものだがこの世界においての人類未発見元素「グレイ一一」を利用した兵器開発が開始。

それと同時にBETAに対する大気圏外防衛システムとして、対宇宙全周防衛拠点兵器群「シャドウ（SHADOW：Spaceward Hardware for All-Round Defensive Ordnances and Warheads）」が建造される。

しかしながらこのことは日本国内ではあまり大きな影響は起つておらず。

大きな出来事としてはもともとの世界の日本にあつた空軍を解体して陸海軍に再編成したことである。

「遂に日本も対BETA用の再軍備が始まつたか・・・」

「グルル（どういうことだ？）」

「お前さんも知つての通り、BETAには光線属性という強力な対空攻撃手段を持つた種族がいる。そのために事実上大気圏内での空中作戦が不可能になつてゐるんだ。」

「グウ（なるほど・・・）」

「だから不必要になつた空軍を解体して陸海軍、それと大気圏外活動を行う宇宙軍、この三軍に再編成を行つたのさ。おそらく戦闘機はこれから戦術機や宇宙活動用のシャトルなどの資材にされるだろうな。」

それも当然の成り行きである。

光線属種といふのは1975年現在で一種類見つかっており、光線種と重光線種の一類類である。

どちらともとんでもない出力の光線を照射することが可能な種類であり最大有効射程距離は少なくとも数十?と言われており、射撃制度も異常なほどに性格があり高速で高度10000Mを飛行する戦闘機ですら撃ち落としてしまうのである。

これにより空爆などの戦術が使えなくなりお荷物と化していたのである。

余談だが現状ではアラガミに対しても脅威なのはこの光線属種である。

少なくとも主人公はまだ熱量子攻撃に対して全く耐性を持つていなければ、もしもまともに光線を食らえれば即死である。

「・・・（光線属種か・・）」

「まあ、陸海軍を増強したからと言つてどうにかなるものではないと思つがね。」

BETA日本上陸まで残り・・・13年。

第9話 アラガミ、焦るとのこと

1978.

人類はその生活領域を急速にBETAに奪われ行き、遂にはヨーラシア北西部制圧を許してしまった。

しかし人類はとてもなく大きな犠牲の代償として後に「ヴォルクデータ」呼ばることになる貴重なHIVE内の情報を入手。またこの年、ソ連はBETA進行によって領土を東西に分割されてしまう。

さらに、中東が国家・宗教を超えて人類にとっての「聖戦」を宣言し一斉反攻作戦に出る、結果として一時的な戦線の押し上げに成功、しかしあくまで一時的なものであった。

「遂に大国ソ連がも致命的な損害を受ける・・・か」

「・・・(・・・)」

「第一次世界大戦以前からずっと強大な勢力を誇ってきた国家が壊れてゆく、なんともおかしなものだ。かつてはその有り余る力で宇宙開発先進国などと呼ばれるほど進んでいたものも全て、全てBETAによって台無しになつたわけか。」

「・・・(・・・)」

「それにしてもあの中東がこのように結束して何かを成し遂げるなんて果たしてだれが想像できただろうかね。「聖戦」か、たしかにこの状況下ではそういうても過言でもないかんもな。」

「・・・(・・・)」

「お前さんはどう思う？」

「グルアアア……（これだけじゃあ時間稼ぎにしかならない……）」

「……まあ、そうだろうな。圧倒的物量、さらに根本的な性能差、精神論で抑え込めるものではないだろう。だが、私はある種の感動すら覚えたよ。人類が共通の敵に対して一つになれることが証明されたのだから、まあ。」

「「アメリカは別として、だ（アメリカは別だ）」」

実際問題ではアメリカも一つになつてゐる中に入るだらう。ただ、そのやり方が違うのではないだらうか。眞実は分からぬ、おそらくアメリカ自身にさえ。

第10話 アラカリ、徵兵について知るとのこと

1980年、遂に日本に戦後以来初めてある制度が発令された、それは「徵兵制度」である。

基本的には特定年齢以上の男性を国家の選出で徵兵するもので現在の徵兵年齢は満20歳。

当然であるが近藤さんも徵兵年齢に達しているためいつ徵兵されてもおかしくない状況であった。

このころになると戦術機開発及び配備が激化し次々と新型が配備されていく、しかしそれもBETA戦線に大きな変化をもたらすものではなく大きな戦局の変化につながることはなかつた。

それと同時にこれまで技術提供をしていたアメリカが諸国家の技術の成熟を理由に対外への次世代戦術機開発技術の移転を禁止。

また日本国内では対アメリカで行われていた第一世代戦術機生産・運用技術の獲得計画を終了、国内での戦術機の生産を開始する。そしてそれに応すべく日本では教育基本法の改定、英才教育・適正者抽出という手法をとることとなる。

「うーん、徵兵制度の復活か。後方国家であつた日本がそこまでしなければならないほどに最前線は末期化してきているのか・・・」

「グルルルルル（それよりも教育基本法の改定つて・・・本当にここまでせつぱつまつてくるとは）」

「たしかに教育基本法の改定は話題としては大きなものだね。だがしかしこの改定はまだ第一段階的なものだらうね。」

「グルアアア（どうこうことだー？）」

「まだまだこれだけで済むはずがない、これからさらに状況は悪化していくだろ？ それに今回の改正だけで対応しきれるとは到底思えないのだよ。」

「グウウウ（たしかに・・・）」

「それに、この徴兵年齢もこれからどんどん下がるだろ？ それこそ世界大戦末期のころ、いや下手をするとそれ以上に。」

「・・・（そうか・・・だからオルタの原作では女性まで戦闘に・・・）」

「なんにしろまだこれは始まりに過ぎないのは間違いない、私もいつ徴兵されるか分かつたものじゃないし一度徴兵されたら戻つてこれなさそうだしね。」

「ガウウ（そんなこといわないでくれよ・・・）」

「もしも私が何かしらの研究者とかなら徴兵を免れるかも知れないけれども。私はいたつて健康な一般企業のサラリーマンだからね。」

「・・・（近藤さんが徴兵されるかも知れない・・・）」

「まあ、その時はあきらめて死地に向かうしかないわけだ。」

「・・・（・・・）」

現在32歳でいたつて健康な普通のサラリーマンである近藤さんはいつ徴兵されてもおかしくないのは事実であり、ひとたび国から徴

兵礼状が来れば拒否権も持たないのである。
果たして・・・

第10話 アラカリ、徵兵について知るの」と（後書き）

実は徵兵についてはかなり今後も変化していきます。
ですがいちいちその変化をすばらうな筆者が書いていくとは思えない。
・

第1-1話 アラカリ、「化け物」を再認識するとのこと

1982年。

この年、ソ連領であつたアラスカをアメリカが50年といつ期限で租借することが議会承認される。

またそれに対する軍事的保険措置としてアメリカはコーコン基地を国連に対して50円間の無償貸し出しを行う。

さらにこの前年には北欧がBETA制圧領域となり、ヨーロッパ圏に手がかかるた。

しかし悪報ばかりではなく設置が進められていたSHADOWが遂に運用開始、これにより大気圏外からの新たなBETAの侵入はなくなることとなる。

もうひとつ手を遅れであつたのだが……

日本ではこの年になつてやつと国内生産戦術機として後の82式（F-4J改）「瑞鶴」が配備される。

それと同時に国産次世代戦術機開発に向けて官民一体で技術開発が進められることとなる。

「ググるルル（近藤さんよ、わざわざライセンスを取つてまで国内で戦術機を開発する必要はあつたのか？）」

「つーむ、それは人によつて意見が分かれるだらうな。しかし少なうとも私はこれに意味はあつたと思つてゐる。」

近藤さんはサラリーマンとして働くうちに日本という国がどこまでも海外に頼つて居るというのが分かつていていた。

（我々の生きる現代日本ではまだ「技術」においては他国より高水準であるとされ技術国家と言われているが、それでも実際問題は戦闘機などといった軍需関係技術では物凄く遅れているのである。）

そしてこうは言いたくないのだが、「この世の中の技術でまったく戦争に関係しない技術は極少数である」というのが近藤さんの持論なのである。

特に航空技術に関してはほぼ全ての技術が戦争に関係したもしくは戦争のために作られた技術なのである。

（我々が乗る民間飛行機も元をたどれば大型爆撃機だつたり輸送機だつたりの技術がつかわれているのである。）

それゆえにせめて自由に使えなくともその技術だけは手に入る、ゆえにライセンス形式に対しこのような意見を持つてているのである。

「それには、お前さん。アメリカがいつまでも無傷だとは限らないんだ。もしかしたらいきなりBETAが現れて崩壊するかもしれない、いやBETAに限らずに何かしら人類に敵対する「化け物」が現れて崩壊するかもしれないだろう。その時せめて技術をライセンスだろうがなんだろうが持つていればどうにでも出来るというものがだ。」

「・・・（「化け物」・・・それもそうだ。自分がこの世界にアラガミなんかとしている以上はどんなアラガミがいきなりあらわれてもおかしくなんてない。でも・・・）」

「まあ、そんなことにはならないことを祈ることしか私たちにはできんよ。それに、もしもBETAすら超えるような「化け物」が現れた日には人類はおそらく生き残ることをあきらめるだろうね、たとえそれが味方だとしても・・・だ。」

「（つー？）」

「まあ今、私でできることは毎日真面目に仕事して適度に酒を飲み
ちゃんと眠って規則正しい生活をすることだ。うだうだと考えても
どうにもならんよ。・・・さて、ひょっと酒を取つてくるよ。」

「（生きる）とをあきらめる…そんなことがあるわけがない、だ
つて味方なのに。なぜ？意味が分からない・・・」

第12話 近藤さん、憤るとの「こと

1988年。

この年、近藤さんが予想していた「教育基本法のさらなる改定」が起ることとなる。

行われた改定はもはや全面改定と言つて差し支えない内容のもので、主な内容としては「義務教育課程科目の切り捨て」「大学の統廃合」「衛士育成主体主義」・・・などといったよつなもので今までのものからするとあまりにも大きな変化であった。

また前年には日本帝国は国際連合常任理事国の一国となる、今回の追加によつて日本のはかにオーストラリアも常任理事国化したのだが、この新常任理事国である日本とオーストラリアは拒否権が2007年までのあいだ凍結されている状態であり、事実上それほど今までの状態と変わつたわけではない。

欧洲においては各国が英國領に一時政府を構え国家機能自体の移転を行つているのだが、当然その原因はBETA進行である。BETAは欧洲もかなりの範囲を制圧し各地にHIVE建設を開発しており、その新造HIVEからのBETA戦力も相まって戦線は崩壊、この先欧洲戦線は巻き返すことがなかつた。

それとは別でアメリカが五次元効果弾通称すなわちG弾の実験に成功。

それと同時にBETA作戦としてG弾を使用した焦土作戦を提案、作戦内容はG弾によつてHIVEを制圧、その後HIVE内からG元素を採取、G弾を量産しそのG弾によつてまたHIVEを制圧する、というサイクルを繰り返し最終的には大量のG弾によつてオジナルHIVEを殲滅するというもの。

結果としては不採用となつたのだがこれによつて国間でG弾議論が行われることとなる。

「やはつじになつたか・・・」

「グルルルルル（うわあ、本当に近藤さんの言つとおりになつてしまつた・・・）」

「なるほど使える者は全て兵士として投入するつもりか、最近では同僚も氣づけば減つてゐるしな。これ本氣で末期戦の形相だな。」

「それよりも問題なのがこれだ！」

「グラア（近藤さんが声を荒げるなんてりじへないね）」

「すまない、だが、アメリカは何を考えているのだ！？こんな案が通るわけがない！核兵器では飽き足らずにこのようなものまで作り出すか！-」

「グルルル（まあまあ、不採用になつたんだから・・・ね？）」

「お前さんはアメリカを甘く見てゐる。奴らは一度やりだしたら自らの「正義」とやらのままにどこまでもやり通すぞ、今にもっとトンデモナイモノをげほつげほつ-」

「グラアアア（なにやつてんだよ近藤さん！咳き込むへりこならもつと冷静に話なよ-）」

「げほつ・・・」

「ガオ（ほり、水でも飲んで落ち着いて）」

「つむ、ありがと。」

「（前に核兵器の話があつた時は冷静で俺をなだめる側だったのなんでこんなに・・・？）」

果たして、なぜ近藤さんはここまで起つていいのだろうか？
それには彼なりの信念が関係している、それはとても複雑に見えて
根の部分は単純なものだ。

近藤さんは核兵器については冷静だった、それは賛成こそしないもの
の「ほかに道がなく使わざるを得なかつた」からである。
すなわち手段がないからそうせざるをえなかつた、といふことは
近藤さんはどこまでも寛大なのである。

しかしわざわざ破滅的手段を自ら開発してまで行つことを思じとは
しないのだ。

ゆえに近藤さんはこのアメリカの作戦が許せなかつた、ほかに研究
の使用もあつたであろうに「わざわざ破壊兵器を開発しあげくそれ
を使おうとしてる」という行動が。

そして期限は迫つていぐ。

日本にBETAが上陸する1988年まで、残り10年。

第1-2話 近藤さん、憤るとのじと（後書き）

もしもこの作品の資料が見たいという方がありましたら感想にてご連絡ください。

もしも連絡がありましたら、現在で判明している範囲内での設定を別途で投稿します。

そして今気づいたのですが、主人公の名前考えてなかつた〇一〇
主人公の名前募集中です、候補は感想までお願いします。

第1-3話 正史、外れ始めるひとのじと（前書き）

そろそろほのぼのが壊れ始めます。

そして今回と次回はおそらく主人公出てきません、それでもいいといふ方はどうぞお進みください。

いちおう読んでなくとも後に主人公と近藤さんによる作中説明が入るので大丈夫だと思います、たぶん。

第13話 正史、外れ始めるといふこと

1990年。

BETAが本格的な東進を開始した。
この結果主戦場が東アジア・東南アジア・ヨーラシア北東部へと移る。

またこの年にアメリカは新世代戦術機YF-22、後のF-22Aラプターの正式採用を決定。

四年にわたる開発競争に終止符が打たれることとなる。

そして・・・

所はいつもの横浜にある神社から移り、北アメリカ大陸。ここで正史にはなかつたある変化が起きていた。

「いつたい、こらはビッグことだ？核の影響が予想以上に大きかつたといふことなのか？いや、それにしては・・・」

「少佐殿！新しい報告が上がってきております。確認を。」

「ふむ、ありがとう。下がつて良いぞ。」

「ハツ！」

ここは北アメリカ大陸アメリカ・カナダ国境付近の観測基地である。この少佐はこの基地の一応の責任者であり、それと同時に核汚染地域のデータ採取の担当者でもあった。

そんな彼に妙な報告書が最近上がつてくるよつになつたのはつい最近のことだ。

その主な内容は、「ここ最近特定の範囲内の放射能濃度が極端に下がっている」というものとその地域にほぼ重なる範囲で「ここ一年ほどで観測される生物数が急激に減少、下手をすると絶滅するかもしれないほどで、すでに数種類の大型生物が半年以上発見の報告が出ていない」というもの。

「一体どういうことだ？まだ生物の減少だけなら放射能による影響と考えることも出来るだろうが・・・なぜその原因と考えられる放射能がこれまでここ数年で急激に減少している？訳が分からぬ、前例がなさすぎる、何よりも放射能が急速に低下するなんてことはまずありえない。だが、現実としてこいついう報告が上がっているわけで・・・」

そこにノックとともにに入つてくるものがいた。

「しょ、少佐殿！緊急事態発生です！しょ、正体不明の超大型生物が確認されました！」

「何だとっー？BETAか！？いやだがどこから・・・」

「それが違うのです！あればBETAなんかではありません！少なくとも既存の種類のどのBETAにも当てはまりません！」

「詳細を報告しろー！」

「ん、はい！本日1344、観測部隊が低空飛行観測を行つた時に発見、その後観測機は消息不明！おそらく未確認生命体の攻撃によつて落とされたものと思われます！また、最後に入った通信によると未確認生命体はおよそ・・・」

「なんだ？早く言えつ！」

「ぜ、全高およそ200M・・・・全高およそ200Mとのことです！」

「な、なんだとつー?200M!/?馬鹿なーあの要塞級ですり60M前後なのだぞ!200Mといえばその三倍だぞ!/?そ・ん・ば・い・だ!」

「し、しかし！観測隊は地表500Mほどを飛行しておりました！それを落とす！」

「黙れ！光線属種なら・・・落とせるだらうが！」

「ですが！間違いなく未確認なのです！光線属種などと見間違えるとはー！」

「なら光線属種でないというならなんだといふんだーこの非常識な大きさなどあつてたまるか！」

少佐が信じたくないのも当然である。

既存のB E T Aでさえ要塞・突撃・要撃属種は10Mを超えるような大きさなのだ。

それですら戦術機でもないと対抗できない状態なのに、もしも本当に200Mなどという化け物が現れればどうなるかは目に見えている。

ただ、そこに待つのは圧倒的な躊躇、ただ歩くだけで戦術機が潰されていく、悪夢以外の何物でもないだろ？。

しかし、その悪夢は現実となり、着々と近づいていた。

『基地内全体に緊急放送！基地内全体に緊急放送！未確認の大型生命体を確認！繰り返す！未確認の大型生命体を確認！現在の距離は8000！繰り返す現在の距離は8000！戦術機パイロットは緊急発進体制に移れ！繰り返す！戦術機パイロットは緊急発進体制に移れ！』

「・・・まさか本当だというのか。嘘だ！信じられるものか！」

「少佐殿！そんなことを言つて居る場合ではないでしょつー・迎撃命令を」

『！？未確認生命体は驚異的速度でこちらに向かっています！距離・
・70000！65000！60000！50000！基地に、つわああ
ああああああああああ』

「そんな馬鹿な！」

1990年某日、16時27分現地時間。

国境に存在した基地が一つ、消えることとなつた・・・

第14話 少佐、死にそこなうとのこと

謎の「超」大型生命体による観測基地の襲撃の次の日、アメリカ国内の特に軍部は騒がしいことになつていた。

観測用のものとはいえ立派な基地がたつたの数十分で壊滅するという異常事態、B E T A であるかどうかなどといふことは考えずとにかく対策についてが話し合われた、はずだった。なぜなら、もしかするとそのまま気まぐれに攻めてくるかもしれないのだから。

「そもそもだ！こんな化け物の存在を報告していなかつた基地にすべての責任はあるのだ！」

「それをいうなら中将。あなたがあそこの最高責任者ではありますか。部下に投げ出していたあなたにこそ責任があるので？」

「なんだと！？」

「今は責任の所在を問うべき時間だつたか！？中将！少将！？」

「責任などはあとでどうでもすればいい。それよりも今我々がすべきことはいかにしてこの未知の生命体、いや生命かすらもわかつていないので・・・とにかくこの未知の存在からアメリカを守り抜くかといふことだ。」

この場には北部方面の将官クラスの軍人がほぼ全員集まつてゐる。これは異例の事態なのは間違いない。だが、それほどまでに基地を強襲した未知の存在を脅威として感じていたのである。

「現在わかっているのはこれだけです。まさしくの未知の存在はここ数年で発生したであらうということ、そしておそらく周辺地域の放射能濃度の急速な低下や生物数の減少に関係があるということ、最後に少なくとも陸上を200? / h以上の速度で走れるということ。たったのこれだけです。」

「へえうー。せめてどうこう行動をとかは分からんかったのか!？」

「それが・・・」

「中将殿、それについては自分が説明させてもいいます。」

「む、少佐。もう動いていいのかね?まあ、唯一の生き残りである少佐本人から話を聞けるのであればそれに越したことではないが・・・」

「いえ、大将殿。お気遣いは結構です。今自分がなによりもしたいことは奴を苦しませて殺すことですから。そのためならば、まつたぐ。」

「さうか・・・しかし無理はするな。それで結局死んでしまってはどうにもならん。」

「ありがたいお言葉です。」

「そんなことより早く説明をせんか!」

「中将・・・」

「中将殿、分かりました。では説明をさせていただきます。そもそもの始まりは」

その後少佐は一時間以上の時間を使いその場にいた全員に対して自分の汁つる限りのことを話しつづいた。

しかし、その内容は絶望としか言えないようなものであった・・・

「……………」

「……………」

将官たちは質問が無かつたのではない。

いや、聞きたいことなら山ほどあつたださう。

未知の存在の弱点や行動パターン、ほかにもいろいろ。
しかし今少佐に聞いても何もこれ以上は分からぬ、ということを理解したのだ。

「なるほど・・・少なくとも200Mか・・・頭が痛い問題だ。」

「亞音速で地上を移動だと!?本当にそこには生物なのか!?

「・・・」

聞く人によって印象に差はあるども、全員の思考はある共通点へと向かっていた。

すなわち絶望である。

亞音速で陸上を動く全高200M以上の物体、さらにはBEETAのように異常に堅い骨格?を持つおり基地に体当たりをしたにもかかわらず傷らしきものは肉眼ではどうえられなかつた。

果たしてこのよつな「化け物」にどう対処しうとこつのか。

結論から言つとこの会議では方針が決定することはなかつた。

しかし、後に「地上に太陽が落ちた日」と呼ばれることとなる大規模攻撃の、その原因となつたのは間違いなくこの会議であったのであろひ。

第14話 少佐、死に~~死~~なつとのこと（後書き）

ちょっとしたシリアルス回でした。
これが正史からの剥離の本格的な始まりです。
果たして、どうなっていくのか、期待せずに待ちください。

第15話 アラガミ、絶望するとのこと

アメリカの観測基地壊滅より五日後・・・
その事実は隠しきれぬニュースとなつて世界各国に届いていた。
当然、日本にも。

「（・・・やばい、やばいぞこれ）」

「ふむ、『未確認生命体がアメリカの観測基地を強襲！新たなBETAか！？』か・・・」

「（いやいやいやいやいや、200Mとか少なくとも正史ではそんな大きさのBETAはいなかつた、そういうなかつたはず！）」

「『おととい、アメリカの国境附近にある観測基地が何者から攻撃を受け壊滅したことが、アメリカ北部軍高官の会見で判明した。今回基地に攻撃を加えた敵は過去に観測されたことのない生物でありBETAかどうかもまだに不明。』なるほど」

「（まずいつて、これ多分アラガミだよ・・・正史ではこんな事件無かつたもん。さすがに前世の記憶が薄れてもこれだけ大きな事件だつたら覚えてるつて。どうしよう・・・アラガミ側から人類に攻撃を仕掛けたとなれば・・・）」

「『現在わかっている情報ではこの生命体は恐ろしく大きいらしく、少なくとも200Mはあつたとのこと。また唯一の生き残りであるアーノルド少佐の証言によれば時速五百キロメートル以上もの速度で特攻をしてきたとのこと。』・・・五百キロメートル？」

「（ええええ、俺の知ってるウロヴォロスはそんな速度で移動しないよ！？少なくともゲーム中ではそんな速度は出なかつたよ！？なにそれこわい。）」

「『また、基地内から回収されたブラックボックス内に奇跡的に残つていた写真が左図である。』たしかにこれは今までのBETAのデザインとは一線を画しているな・・・」

「（なにそれ？BETAうんぬんの判断基準そこなの！？）『かここれは・・・ウロヴォロス？いや若干何かが違うような・・・でも・・・アラガミなのは確定かな、はははそれこそ『デザイン的に。』』

「『今後、アメリカ軍は対応策を協議し、決定次第行動に移すこと。』まさか・・・G弾でも使うつもりか・・・しかし、今は使わざるを得ないし・・・』

「（おおー！アメリカならできる！多分、熱量弾ならアラガミだつて倒せる・・・進化してなければ・・・いや、でもG弾の耐性なんて持つてないよな？持つてないでくれ・・・）』

「『また、未確認生命体が発見された地域ではここ数年で急激に放射能濃度が低下するなどといった怪奇現象が起こつており、その関連性についても気になるところである』・・・放射能濃度が低下？」

「（それって・・・十中八九、放射能を捕食してるね。うん、もう俺しらね。）』

アラガミは考へることをやめた。

どう考へても絶望、考へれば考へるだけマズイ情報に繋がっていく

のだ。

それはやめたくもなる。

結局十分ほど思考停止状態は続く、まあ復帰したのだが。

「ん？お前さん、どうした？なんだかものすげ落ち込んでいるよう見えるが・・・」

「グルルルルル（あ、うん気にしないで・・・まほほほ）」

正史からの脱線は加速していく。

第16話 悪夢、加速するUFO

未確認生命体の観測基地襲撃より十日後。
この日、遂にアメリカはこの敵に対する行動を開始する。

その作戦はとても単純なものだった。

少数ではあつたが完成していたG弾を敵に打ち込み消し飛ばしてしまおう、といつ。

だが、実際には環境被害のデータを取ろうとする試みや採算に合つのかの実証、さらには他国に対するG弾の有用性のアピールとしての意味すら含んだ行動であった。

「あの化け物を消し飛ばしてやれる日が来た・・・十日も待つことになるとは・・・塵すら残さずキレイに消えて地獄で後悔しろ!」

「あ、あの・・・少佐殿?」

「なんだ?」

「い、いえ。何でもありません・・・そ、そういうれば作戦開始時刻まで残り一時間となりました。配置についてください。」

「ああ?」

「いえ、ですから、その・・・」

「分かつてゐよ、配置につければいいんだひづへじゃあな。」

「ハツ・・・荒れてるなあ、無理もないナビ、とぼつかつて食ら

いたくないなあ」

少佐はもともと基地に執着があつたわけではないし、部下思いだつたわけでもない。

しかし、自分の管理していたものが経つた数分のうちになすすべもなく壊され、しかも自分だけが生き残ってしまったのだ。居場所がなくなってしまいただただイラつきだけが強くなつていった結果があの荒れ模様であつた。

そして一時間などこの警戒態勢の中ではあつといつ間に過ぎてゆき、発射まで残り五分となつた。

「未確認生命体を補足。動きはありません。」

「ミサイル発射シーケンスは順調。弾頭の搭載も済みました。」

「ハッチの解放完了。点火準備も完了です。」

「全行程の完了を確認。1230まで残り4分・・・」

「3分・・・」

「2分・・・」

「もう少しだ・・・あと1分もすればあの化け物はミニンチになる・・・」

「1分・・・」

「人間の本気を思い知れ、化け物！」

「3・・・2・・・1・・・発射！」

12時30分、G弾弾頭ミサイルは予定どおりに発射される。
12時42分、G弾は予定の地点にて着弾、爆発が確認された。

人類の持つ最高の攻撃手段によつて未確認生物、いやアラガミは倒されたかに見えた・・・
しかし、悪夢は加速する。

「衛星画像映りました！間違いなく着弾しています！作戦成功です！」

悪夢は

「これで・・・」

終わつたのではない

「あの化け物は・・・」

新たな力を喰らい

「終わりだ！」

進化したのだ

「・・・新しい衛星画像入りました！・・・目標、完全に沈黙、いえ、動いている？目標、生存しています！？」

その日、地上に太陽が生まれた。

黒くまがまがしい光を発するG弾といつ名の太陽が地上に落ちたのだ。

そしてアラガミはその太陽すら喰らい、さらに進化した姿で、産声を上げた。

第1-6話 悪夢、加速するヒト（後書き）

アラガミ（主人公でない）が暴走しております。
なんというのか魔改造が進んだ結果、これだれが倒せるの？…といつ
たものになりつつあります。
どうしたものか…

第17話 悪夢、空を壊すとの「J」と

「そんな・・・馬鹿な・・・」

「嘘だろ?」

「生きてこね・・・だと」

その日、アメリカの最終兵器にして最高火力を誇るG弾の投下により終わると思われていた「未確認生命体」との接触は・・・。その未確認生命体、後の「アラガミ」がG弾による攻撃を耐えきつたことによつて、混沌としていた。

「馬鹿な! そんなことがあつてたまるか! 五次元効果だぞ! ? 重力偏重にどうやつて耐えるというんだ! ? どれだけ常識はずれなんだあの「化け物」はあ! ?

それもそうである、そもそもG弾といつのはあらゆる質量物がもなく受ける重力を兵器として使用したものであり、それゆえに回避不能・防御不能の攻撃となるのである。

それが、間違いなく質量物であろうとこいつものに耐えられてしまつたのである。

実のところ、このアラガミは耐えきれいでいるわけではない、事実一度はアラガミは全身の90%以上ものオラクル細胞が崩壊したのだ。ただ、アメリカ軍にとつては運の悪いことに、そつただただ運の悪いことに「コア」を破壊しきれなかつたのだ。

そしてアラガミはG弾という要素を学習し、対応し、回復し、進化する。

もしも、もしもだアメリカ軍がもう一発だけでもG弾を打っていたら？

もしも、重力偏差の広がりがコアに届いていたら？
もしも、再生後すぐに止めを入れていれば？

アラガミは間違いなく消滅していたことであろう。

だが、たとえ運が悪かつたにしてもこの先に待つのは悪夢のみである。

G弾にすら耐性を持ち始めたこのアラガミを倒すすべは、もはやアメリカ軍には、無い。

「くそがつ！すぐさま次のG弾を用意しろ！使える限りの武装を使つて消し飛ばせ！」

もう遅い

「1400までに発射準備を整えろ！無理だ？やれと言つたらやれ殺さなかつたら確実にマズイ！」

荒ぶる神は

「申請が必要？そんなもの緊急事態宣言で無視しろ！今こいつを殺さなかつたら確実にマズイ！」

自らを

「核も用意しろ！汚染？知るかそんなもの！どうせもう手遅れなくらい汚染されてるわつ！気にするな！」

傷つけたものを

「早く…はや
」

「目標に動きあり…これは…・・・？」ひりひりを見ていろ。」

見逃したりなど、しない

「膨大な熱量が目標から確認されました！…・・・じゅ、重力偏重が、重力偏重が目的周辺から消えていきます…」

「つー…やはり放射能の一件も…」いつが…・・・

「あ、ああああ、ああああ

「どうしたオペレーター！」

「目標が重力偏重を、まるでG弾…・・・いえ、M-L機関のように制御しています！」

「なんだと…それはどう…・・・」

ズッ…ゴゴゴゴゴゴゴ…・・・

大地を揺るがす発射音とともに、アラガミから何かが空に向かつて打ち出された。

それは正史において人類の最終兵器になるはずだった、いや、なつたものの力の断片であった。

そして、それは空にあつた人類の防衛線を…・それどころか空そのものを。

打ち壊した。

第1-8話 アラガミ、開発を試みるとのり

さて、アメリカでは混沌としてテイルの頃。

日本のアラガミが居座る神社ではけよつとした事件が起きていた。

「グルルルル（なんで、今まで隠していたのさ）」

「いや、隠していた訳では・・・」

「グラアー（言い訳無用！）」

「いた、だからな？お前さん落ち着け、そんなに怒ることでもないだろ？？」

近藤さんとアラガミが喧嘩に近い状態になっていたのである。

そもそもの原因は今より数時間前にアラガミが近藤さんの仕事鞄からあるものを見つけたことだった。

それは近藤さんの社員証であった。

本来ならそれがどうしたというもののだがそこに書かれていた企業名や近藤さんの役職が問題であった

今より数時間前の回想

「グルルル（なんだか、この体にもすっかり慣れたなあ・・・）」

「グラア（休日だし掃除でもしようかな）」

アラガミの神社での生活の習慣の一つに休日中に必ず一回は掃除す

る、というものがあった。

そのため今日も掃除道具をひっぱり出してきて掃除をしていたのだが……

「グ？（ん？）」

アラガミが見つけたのは、近藤さんの仕事鞄からいろいろなものがぶちまけられているような状態だったのだ。

このかばんは本来なら留め具にかけておくものなのだがなぜかこの日は地面に置かれていた、いや正しくは落ちていた。

「グルルウ（うわー、留め具が壊れて落ちたのか、近藤さんに頼んで今度修理してもらわないとなあ）」

そういうながらも前足と口だけで器用にぶらまけられている書類などを集めていたが、そこで問題の社員証が皿に入った。

「・・・（そういえば、近藤さんがどんなところで働いているのか知らないよな）」

「・・・（見たって罪にはならないよな？）」

「・・・（よし、近藤さんはいなこし見てしまおう）」

そしてその社員証に書かれていたのは以下ののような内容だった。

近藤忠保
藤澤総工

機甲武装部門部長

「・・・グラア？（・・・へ？）」

「お前さん、帰ってきたぞ。たしか買つてくれるものは・・・」

そして現在に至る・・・と

「グルルルルル（さてと、これを一般的なサラリーマンといつから始めようかな）」

「痛い、頼むからのしかからないでくれ・・・いや、本当に痛いんだ」

「グル（質問にだけ答えてくれればいいよ、質問にだけね？）」

そこには拒否権などなくただ近藤さんはうなずくしかなかった。それほどこここの時のアラガミは迫力があったのである。

「ガルルル（ます、この部門にいたのはいつから？）」

「入社当時から」

「グラアアアア（じゃあ、部長になつたのは？）」

「1988年、40歳の時」

「グ（最後に、何で言わなかつたの？）」

「聞かれなかつたから、それと私はこれが普通だと思つていたから」

「・・・」

「・・・」

「グウウ・・・（だるいと思つたよ・・・）」

「いや、そのだな・・・隠していたわけではないんだ、それだけは信じてくれ」

「グワアア（まあ、近藤さんのことだから本当にやつなんだろうねえ）」

アラガミは勝手に納得し始めた。

勝手に怒つて、勝手に静まる、少々身勝手なことである。

「グラア（で、具体的には何を作つてるの？）」

「う、む、それが・・・私たちは基本的に設計ばかりでな・・・まあ戦術機とか戦闘機とかいろいろとやつてているが特許や資源や問題だらけでなあ、最近は営業ばっかりやつてているような気がする。」

「・・・（それなら、自分の原作知識を投入出来たらいいんだけどなあ）」

そこに数枚の書類が目に入つた。

国産技術次世代戦術機開発計画に関する書類であった。

その中にはアラガミにとつても見覚えのある戦術機である後の不知火も見られた。

しかし、アラガミが見入ったのはそれではなく、藤澤総工が提案した「N-X-01」という奇妙な機体だった。

「・・・（これは？原作では見なかつた、いや設定すらなかつた？）

」

藤澤総工の提案したNX-01という機体は色々な意味で可笑しかつた。

まずこの型番、今までのT-SFどじろかソやXですらないNXというもの。

それにあんまりにも決まっていない部分の多い提出書類。異常なまでに国内技術にこだわる姿勢。どれをとっても奇妙なものであつた。

「ん？ああ、それか。その空白部分は開発をしながら新技術で埋めていくと上が言つていてな。現状では多重構造フレームとマルチセンサーぐらいしか決定していないんだよ。」

ここにアラガミはとんでもないことを考え付いた。いつそれを究極の機体にしようぢゃ ないかと。自分はアラガミで単体としては素晴らしい力を持つている、しかしだ今まではこの神社だけですら守り切れるか分かつたものではない。ならば、周りを強くすればいいのではないか、そう思い至つたのである。

「グラア（ねえ、これの開発にかかわらしてよ）」

こうして意外な方向でも世界は正史から外れだした。

第18話 アラカリ、開発を試みるヒューリ（後書き）

まさかの開発スタート、なぜいつなつた。

第1-9話 南極、調査するヒト

前話から所変わつて南極、ヒトも正史から外れた存在が居座つていた。

それはやはり「アラガミ」であった。

それは「」のよつた形で怪談のよつに各國南極基地隊員の間で語られていた。

曰く、南極点には白い竜のような生き物が居座つているとのこと。
曰く、その生き物は周りの天候を自由自在に操り吹雪などをする
とのこと。

曰く、その生き物に気に入られたものは南極点に可笑しいほどにす
んなりと行けるとのこと。

曰く、その生き物は気に入らないものには悪天候を与え音もなく喰
らつていいくとのこと。

曰く、隊員達が死体すら見つからなかつたときほこの生き物に喰わ
れていふとのこと。

曰く、今まで死体が見つからなかつた隊員たちの手記などには「こと
ごとく「異常なほどの悪天候」であつた」ということが書かれている
とのこと。

他にも色々とあるが比較的信憑性が高いとされている六個のうわさ
を紹介してみた。

このような噂が流れだしたのは大体、1970年あたりである。

最初はただただ噂であったのが、1981年に正体不明の足跡が確
認されたことにより急激に信憑性を持つようになり、もはや隊員た
ちの中では「南極点には何かいる」というのは共通認識とかしてい
た。

しかし、かなりの時間が経ち何度もその生き物を調べるための隊ま

で送り込まれたにもかかわらず、いまだに姿は確認されていなかつた。

そして、1990年に第12次南極点未確認生命体調査隊が結成されることとなる。

今回の調査隊の主な任務は「南極点への到達」「未確認生物の痕跡の発見」「可能ならば未確認生物との接触」であった。

「にしても、遂に俺らが南極点にいけるんすね！先輩、なんだか興奮します！」

「お、おう、まあ興奮はするが……とにかく落ち着け桐峰。」

「まあまあ、隊長。新入り君が興奮するのも仕方がないって。初めての任務がこれだもんね。それはテンションも上がるや。」

「まあ、そりだが。事実俺も初めて南極点に行けるとなつたときは興奮した。だが、落ち着け桐峰。」

「そうだね……本当にあの時の隊長のはしゃぎ具合といつたら……ふふふ、新人君よりも凄かつたかもね」

「ちょっと黙つてくれないか……藤堂、お前がしゃべるとやいやしくなる。後、過去のことを持ち出すな。」

「分かつたから、その服の中側から向けてくる拳銃をどうにかしてくれない？」

「へ？ 拳銃？」

「大丈夫だ、セーフティーはかかっている、今はな。」

「おお、怖い怖い。僕もまだ死にたくないから血量するよ。」

「お前ら、何やってんだ……隊長、あなたは止める役でしょうが、何一緒になつて騒いでんだ。というか怖いから拳銃を持つな、セーフティーでも持つな。」

「……すまない。」

「やつしょえは新入り、お前に朗報だ。」

「はい！なんですか！」

「どうもやつしょさんは期限が悪いそうだ、見ろ外は大荒れ。これならやつしょさんの姿を見れるかもな、まあ死ぬ直前だろ？が。」

「ええええええええ……って、あれ？そんなに天候悪い？ついでに見えませんよ？」

「ああ、やつしょのは嘘だ。本当の朗報は」

「副隊長はそのやつしょと嘘をつく癖をどうにかした方がいいです。」

「本当に直した方がいいよ、いつか痛い目見るよ？」

「藤堂、お前にだけはいわれたくない。」

「どうしょとかな？新田副隊長？」

「新田、結局何を言いに来たんだ？」

「ああ、えーとだな。俺の言いたかったのはだ、今回の調査隊は俺ら日本組を中心に作られるらしい。ついでに言つと六人隊だそうだ。」

「む、六人は少ないのか？」

「そうだね、いつも少なくとも二十人以上で作られていたのになんで・・・」

「そりなんすか？てつきり少數精鋭的なもんだと思ってつたつす。」

「（新入りは純粹でいいなあ）」

「？」

「おい、話をつづけるぞ。まあ理由についてだが、おそらくは各國がBETAやなんやと鬼気迫った状態でこっちに人員を割けないと いうのが正解だろう。」

「ふむ、まあそうか。」

「という訳で残りの一名は出発直前に命流するそうだ。以上、報告はこれだけ。質問のある奴は拳手しき、無視するかもしけんが。」

「・・・ねえ、これ朗報ではないよね？」

「」「」「」「」「」「」

そんなこんなで、ここ南極でも正史からのずれが確實に大きくなつ

ていくのであつた。

第12次極点未確認生物調査隊・日本

隊長：伊藤

隆文

副隊長：新田

聰

隊員1：藤堂

依織

計四名

正

第20話 南極、出でんづるのじぶ。

南極、そこは人類の地球上最後の未開拓地であつた場所。

今では人はその中でも極点と言われる場所に旗を立てその周りには各種研究施設が立ち並び極点到達競争の時代とは別の形で熾烈な戦いが繰り広げられていた。

しかし、このマブラヴォルタネイティブの世界においては事情が違つた。

そもそも極限環境に人間の長期間住める環境を作り出すだけでも大変なことである、そこにその出資などをしている本国・企業がBETAという「人類史上初めての共通の敵」に遭遇し、自らの住む場所すら失つた中ではたしてどこのだれがわざわざ莫大な資金を、資源を投入するだろう？

現状ではまだ一部の大団および後方国家が資金を出しているがそれすらここにきて降つてわいた「アラガミ」という新たな脅威のせいに減っていくのは明らかである。

ようするにこの南極調査も何かしらの大きな成果を出さなければ今回で援助をきられてしまつだらう、といつことである。

それどころか、今の今まで縮小こそあれど根本的に削除対象となりえなかつたのは今までの各隊の見つけ出してきたこの地に住みついている「何者」かの証拠があつたからである。

だが、それすらも決定打にはなりえず、今回の第12次調査にて結果が出せなければ打ち切りという通達が隊長、およびアメリカ・ロシアから出向してきた隊員一名には伝えられていたのである。

「というわけだそうだ・・・ノーリッジ少尉、質問等はあるか？」

「いえ、隊長。こちらも事前に伝えられていたものとほぼ同じなので問題はありません。」

「では、ヴェロニカ少尉もこれで……あの、ヴェロニカ少尉？」

「……」

「ヴェロニカ少尉、隊長が確認を取っているのです。反応をしてください。……こいつ、まさか。……隊長、少々お待ちください。」

「

「ん？あ、ああ。」

「スゥウウウウ……ヴェロニカ少尉！ヴェロニカ・エヴァンジエル少尉！起きろ！」

「へ！？は、はい！ヴェロニカ。エヴァンジエルです！階級は少尉です！何事でしょうか！？」

「…………」

「ヴェロニカ少尉……もしかして寝てましたか？というか寝ていましたね？職務怠慢は減俸ですよ。」

「いえいえいえいえ！私は寝てなんかないですよ、隊長！ただ、意識が飛んでいただけで……」

「馬鹿が！それを寝ていたというんだ！お前は合同訓練の頃から本当にいつもいつも氣づいたら寝てやがって……！」

「……ノーリッジ少尉、ヴェロニカ少尉も……喧嘩していないで話聞いてくれますよね？ねえ？」

その瞬間にこの少尉一人に悪寒が走った。

今の今まで温厚そうで、事実ややのんびりとした雰囲気を醸し出していた隊長から脂汗を書くような不気味な気配が漏れ出したのだ、これは恐怖以外の何物でもあるまい。

「す、すいません。（小声で）おい・ヴュローカ少尉とにかく謝罪しろ、早く！」

「（小声で）え、えっとでも寝てなんかいないんだよ？」

「（小声で）言い訳は良いからはや・・・」

「一人とも謝罪とか今はどうでもいいから話、進めようが？」

「「はいっー?」」

アメリカ出向

隊員：ノーリッジ・スティーブン少尉

ロシア出向

隊員：ヴュローカ・エヴァンジョン・ヘル特務少尉

こうして南極に六人の調査隊員がそろつた。

第20話 南極、アラウンドザ・ワールド（後書き）

いきなり始まつた南極についてのお話はいつたんじで終つです。
これからじばらくはまたアラガミの若干普通ではなくなり始めてい
る日常がだらだらと続きます。

番外話 料理、アラガミの日々

さて、読者の皆さん、皆さんが「これこそ至高の食べ物」と思つような食べ物はいつたいなんだろうか。

カレー？

から揚げ？

牛丼？

ピザ？

パスタ？

トカゲの揚げ物？

ビビンバ？

世の中の料理の種類はとてもなく多く、今列挙したものはその中のたった1%にすらならないほどが多い。

そして、これはそんな料理についてで起きた神社の一幕である。

それはとても天気の良い日のこと。

平日であり、近藤さんは会社に働きに行っていた時間であった。アラガミの生活は専業主婦のようなものになってきており、ここ数年では買い出しまで行うようになってきた。

さすがに人のように荷物を持つことはできないので、アラガミ専用の荷車を近藤さんに作ってもらい、買い物表を首にかけて週に二、三回程度出かけるのだ。

メータ級の体を持つアラガミが出歩いてパニックにならないのか？と疑問に思う方もいるだろうがそれについては問題ない。

長年、神社に住み着いているおかげで地元住民はみんな「ああ、神社の子か」というような認識を持っているのである。

ちなみに、地元住民の子供たちにとつては七不思議的存在（主につからいたのか、なんという生き物なのかななどという点）として知

られておつ、度胸試しに使われる」とあります。

そして今日も荒神は荷車を曳いてなじみの店へと向かって行つてい
た。

「（今日はカレーかなあ、近藤さんは料理には関心ないからいつ
も適当なんだよな。せめても「ちよつと考へて食材を書いてほし
いけど……」」

「お、神社の犬じやないか。また賣い物か？」

「ガウー。」

「おお、そうかそうか！で今日は……んー毎度のことだが何作
るんだこれ？」

「グゥウウ（さあ？）」

「まあ、いいか。まあちょっと待つてくれすぐことりてくれるから
な。」

さてなぜ、何を作るのか？などと店主が言つたかといつと、神社の
食材の注文が「今作るものなんて考えずにそのうち使うだらうから
補充しておく」という近藤さん的方式で買い出し内容が創られて
いるからである。

そしてアラガミは「のはたから見ればてきとうとしか言えな」よう
な材料から日々料理を作り出すのである。

「おお、取つてきたぞ。これであつてるか？」

「・・・ガウー（・・・OKーあつてる。）」

「よしよし、じゃあお代は月末払いだからな？近藤さんに忘れないように言つといてくれよ。」

「ガオオ・・・（へ、うん・・・）」

とこんな感じに目的の食材を集めるため精肉店、八百屋、豆腐屋、もろもろ回つて残りが酒屋のみ（当然近藤さんが飲む酒を買いに行くわけだが）となつたところでふとアラガミは思った。

「（カレー作るかと思つてたけど・・・カレールー、あつたつけ？）

「

よつするに献立に不備が見つかつたのである。

そしてアラガミは今は亡きおばあさんと近藤さん以外とは意思疎通が難しいため買い足しも不可能、詰んでしまつたのである。

「（くつ、せめて人の言葉が話せれば・・・くそつ、早く人型になりたいー）」

「（）で大幅変更が必要になつた献立。

だがそこは主婦アラガミである、すぐに今ある食材を思い出す。

そしてそこから導き出されたのは・・・

「（今あるもので作れそつのは・・・）飯、味噌汁、魚が無いから代替えでハンバーグ、後は漬物と絵枝豆、これぐらいかな。）」

和食ぐずれのメニューであつた。

魚が無かつたのはアラガミからすればかなり大きい、（）まで和食

らしにメニューなのになぜかハンバーグ（肉料理で和風なのを作ろうとしたのかということ）とは置いといて、地味に雰囲気が妙だ。

結局、帰宅してそのまま料理を開始することに。

アラガミは自らの身体能力を存分に發揮し、犬のような姿でありますからも口に包丁、お玉、鍋など調理器具を加えることによって料理を可能としていた。

はつきり言って、わざわざそこまでしてまで料理をする意味が分からぬ」と思うだろう。

しかし、近藤さんは料理が上手くなく、それも食べられないほどではないという微妙な味（本人も自覚している）であつたため、アラガミが耐えられなくなり「この体でも料理できる方法はないか！？」と模索してこのやり方にたどり着いたのだ、拍手を送りたい。

「（ふう、なんとか出来上がった・・・）」

「ただいま。」

「グルウー？（帰宅が早い！？）」

「ん？・・・これは味噌汁の匂いか。」

「ガオオ（うん、まあねえ）」

「じゃあせつそく食べるとするかな。」

「グ！（手を洗つてきてください）」

「あ、ああ。」

そうしていつもより一時間も早く帰ってきた近藤さんと食事をし、後片付けに入つたころ。

「あの味噌汁、おいしかったがもう少し薄味にしてくれないか？私的にはもうちょっと…」

「ガウー（自分で作つてから言つてくださーー）」

「すまない、だが作るといつたのはお前なんだわいへ。」

「・・・（はあ、ううだよね）」

「といつ」と、酒を飲んでくる。」

「ガー！ガルルル！（ちょっと…なぜそつなる…？）」

「こんな日常もありだと思ひ。」

日々、人類がその生きる場所を削られていへ中でもこんな日常はあるもんだ、そう思ひ。

番外話 料理、アラガミの日々（後書き）

とこう訳で本編の時系列のどこかに入る日常のお話でした。

第21話 アラガミ、お前を賣つたよ

さて、あんなこと（第18話参照）があつたおかげで少々妙なことになつて、いた神社内であるがまた平常運転に戻り始めていた。そして近藤さんがふとこう言つた。

「そりいえば、お前さんは名前が無かつたよな。」

「・・・ガウ（・・・あ）」

そうである今の今までよく氣付かなかつたものである。実はアラガミは「お前さん」とか「犬こひ」とか「神社の」などと呼ばれていて名前は持つていなかつたのである。

そして荒神本人があんまりにもそういう状況に慣れてしまつたため疑問に思つこともなく十年以上もの間名無しの状態で生活を送ってきたのである。

「む、だが果たして今の今までなぜに気づかなかつたのか・・・？」

「ガウワア（さあ？）」

「お前さんは疑問には思わなかつたのか？」

「グルルル（俺も今の今まで氣にしてすらいなかつたよ）」

「「「つーむ（グルル）」」

とこんな調子であった。

結論から言つとアラガミは代名詞的な呼び方と通称（近所の野良

猫に勝手にシマシマとか名付けたりするのと同じような状態（だつたわけで本当の意味で名無しだったわけではないのだが。

「という訳でお前さんの名前を考えようと思つただが・・・」

近藤さんの前には真新しい数冊の本と筆に和紙が置かれていた。その数冊の本というのはいわゆる命名辞典といつものであり人名事典一冊にペット辞典一冊という構成だった。

「私には子供もないし親戚とも縁がないからな、こういったことは初経験という訳だ、でこういった本を買つてきたわけだ」

「（うわあ、命名する気満々だよ）の人。いや命名するのは良いとして人名事典はペット的存続な俺にはいらないでしょう。それには三冊もあるの？」

「そこでだな、私は致命的な問題を見つけた。それわだ、お前さんの性別が分からぬことだ。そもそもお前さんが生物学的にどういう種類の生き物かも私は知らないわけだ。さて、これはいかに。」

「（やういえん俺の今の体が性別どっちかなんて考えたことなかつたな・・・それにアラガミはヴァジュラ以外では性別が確認されなかつたよつな）」

「ついでに今だから言つてしまつとお前さんについては訳の分からぬ部分も多い。例えば排泄なんかについても私はそれらしい行動を行つているところを見たことはない。ふむ、こうやって眞面目に考えてみると謎だらけだな。」

「グウウウウ（まあ、やつだけど……）」

「まあ、私はお前さんが何者であるかとこの神社から追い出すことはしない。何よりもお前さんは私においしい飯を食べさせてくれるし掃除や洗濯まで、家政婦以上のことをやってのけているわけだ。感謝することはあってもお前さんを追い出すいわれはない。それに・・・私個人としてもお前さんのことは好きだからな。」

アラガミは本当に幸運だったと言えるだろ？

知らない世界にそれも人間としてではなく「アラガミ」として放り出された、とはいえたその世界は自分の知る世界に酷似しており、放り出された場所も元の世界でいう所の日本、その上に今は「おばあさんや近藤さんのように理解のある？」人のもとで生活が出来て、今では近隣住民からはおおよそ友好的に接してもらっている。もしもこれがアメリカなどだったら、研究所などに捕まえられていたら、話は全く違つただろう。

「ウウウウ・・・」

「やつだな、お前さんの名前は、おばあさんが託したこの神社の名前にならって」

「『国守』、いむ國守としよう。」

そして名無しだったアラガミは晴れて姓名ではなく称号のようなものといえ『国守』という名前を貰うこととなる。

第21話 アラガミ、名前を賣つとのこと（後書き）

主人公無双マダーリー！？

という訳で後々重要になりそうな名付け回でした。

さつさと戦術機開発するなり主人公強化するなりしろやという意見
もおありでしょうが、作者の執筆能力的にもう少し後になりそうで
す m (-) m

アラガミ、諭破するとのいと（前書き）

今回の話はアラガミがガオガオ言つていませんが気にしないでください。

理由があるので。

アラガミ、諭破するとのこと

名前を貢つたとはいえ、正直なところ生活は変わらない。

近藤さんは今まで通り「お前さん」と呼ぶし近所の人たちは「神社の」とか「大じる」とか「ボチ」とか・・・まあ変わらない。しかし、アラガミにとつてはそれなりに大きな変化であった。とここまではこれからのは話には関係はない。

そんな中、アラガミは近藤さんと「次世代戦術機」についてで結構眞面目に話をしていたのだ。

「セレ、お前さんが前に開発に関わりたいと言つていたがな。それについての返答をしておいつと想ひや。」

「うそ」

「流石に無理だ。たとえ私が部長でもやつてこい」と懇こんどがある。」

「まあ、やうだよねえ」

「だが、お前さんが考えたことを社に伝える」とぐりこなうできないこともない。」

「と、こうと?」

「要するに、お前さんの考えたものを整理して書類として提出する」とは出来る、まあ名義は私のものになるが。」

「それで十分だけど？」

「・・・いいのか？たとえお前さんがどれほど素晴らしいものを作つても全て私の、いや社の物になつてしまつんだぞ？」

「いや、だつて俺のものになつてもどうにもならないでしょ？」

まあ、これはアラガミの言つとおりである。

所詮人間でないアラガミがこゝへ特許などの権利を持つとも全く持つて意味がないのである。

「・・・それでいいならそうさしだらうが。で、結局お前さんはなぜにあんなことを言い出したんだ」

「なんか・・・じつ・・・ね？ティンと来たんだ」「いつからお前はNTになつた」なんでNT知つてゐるの・・・」

「いや、なんだかそう言わなければならぬ気が・・・」

「・・・」

「言つたくないなら聞かないが・・・ですがにその嘘はいかんどうう。」

「いや？嘘ではないよ。」

「いやだからいつからNTに」「そのネタはもつといんじゃあないかな」・・・

メタ発言多こな、おい。

それもこれも作者が悪いのだが、つてあれ？俺が悪いのか？

まあそんなことは置いておいて、一人（一人と一匹）は本格的に話し出した。

あんなしようもない話をしていたとは思えない真剣さである。

「で正直な話をすると、決まってないことが多すぎない？」このZX
-01つて。」

「うぐ、それは・・・」

「大方コンペの主催者からも文句言われてるんじゃないの？」

「ぐはっー。」

「といふか他の候補がかなり良好っぽいんだけど、特にこの不知火
とかいうのとか・・・」

「・・・」

アラガミは正論を放つた！

近藤さんの精神に231のダメージ！

アラガミは推論を放つた！

弱点を突かれた！近藤さんの精神に661のダメージ！

アラガミは比較論を放つた！

オーバーキル！近藤さんの精神に1329のダメージ！

へんじがないただのしかばねのようだ

「あれ？近藤さん？おーい！」

「・・・分かり切ったことをそこまで言わなくたって、いいじゃな
いか。」

「いや、だつてさあ。」

「ふ、たしかにさ文句も言われた、たしかにほかの候補は良好だ、
しかし私たちの作るZX-01は負けたわけではない！」

「とこりか勝負の舞台に立つてすらいないよね。」

「なんと・・・」

アラガミの追撃！

近藤さんの精神に致命的なダメージ！

「まあまあ、そう落ち込まないで。」

「いや、すまん、なんだかすまん。」

果たしてこれで大丈夫なのか・・・
非常に不安である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8520w/>

GOD EATER ALTERNATIVE LOG

2011年10月29日15時35分発行